

大学授業考

徳 本 達 夫*

On Teaching at University

Tatsuo TOKUMOTO*

「祖母がよくいっていたように『生徒のころの準備が整えば、おのずと教師が現れる』ということよね」
——藤本和子¹⁾

はじめに

小文は、40年間教員生活を送ってきた筆者の標題についての2019年2月時点での覚書がもととなっている。在職中、筆者の同僚との主な話題は学生、とりわけ、課題を抱えている学生の実態と、それに関わる各自の実践についてであった²⁾。学生に共通する課題のほか、個別具体的な課題がある。課題に向き合うことで学生は成長する。学生の成長は教育実践の醍醐味である。学生の成長と教員の成長とは繋がっている。相互主体的な関係を生きるゆえ、両者は相乗効果を示しながら生成を続ける。最終的な進路保障までの関わり、さらには生涯に亘って自己を生き続ける意思と能力を自ら育む関わりに繋がっていく。

教員としての非力の自覚は自らを奮い立たせる。逆に学生側への問責に向かうと、その時点で学生へ向き合う自らの身体が不明となる。先行世代の一人として学生の実態への責任の一端を自覚した共感的想像力を生かし、問題解決へ向けて具体的に取組む。これらは全て教員の身体を通してなされる³⁾。

教育実践では省察性・同僚性・協働性が重要な柱になる。筆者はこのことを自覚した実践に努めてきた。だが、それらはどこまで教員の身体として具体化されてきたか。人は、発せられたその人の言葉ではなく、その身体から学ぶことが大きい。自身の実践を振り返るなか、身体性の部分の解明にどこまで奏功しているか。読者の忌憚のないご批正を賜りたい。

今春（2020年）以降、新型コロナウイルス感染症禍（COVID-19）を受けて、大学授業は対面式からオンライン、遠隔方式への変更を余儀なくされている。新しい方式はどのように学生の主権者としての学び、市民的成熟に資するのか。学生のころの準備はどう整うのか。教員と学生の身体性はどう位置づけるのか。

まずはこの災禍をどう捉えるか。どう向き合うかで

ある。一人ひとりの身体があり様が問われ続けている。残念なことに、日本ではこの災禍に人為的厄災が輪をかけている。言葉を邪険にする直近の為政者たちの振る舞いは社会に悪影響を与えている。社会の大事な基盤を崩壊させる。このことへの危機感から若干の追記を行った。

1. 授業の前提

(1) 学習の履歴＝経験の総体 1947年教育基本法第2条「教育の方針」が強調したように、教育は「あらゆる機会に」「あらゆる場所で」「実際生活に即して」行われる。人は本来、そのように学ぶ。大学教育に関して言えば、大学での授業等を通しての学び、大学内外での実習等による学び、授業外での学びの3者がある。それらが有機的に連関する度合いは、学び手の生活主体としての姿勢による。それゆえ学び手が主体的学習者・民主的主権者に育ち続けることを生涯にわたって支え、励ますことが教育の主目的となる。昨今強調されている、アクティブ・ラーニング（主体的・対話的な深い学び）は、このことをめざす。有機的連関のある学びが結果しなければ、大学教育の不備である。仕組みの問題であり、教員の力不足である。

実社会での学びも大きい。旅行や自己研修、アルバイトや地域活動、学外団体での活動等もある。それらが大学での学びと有機的に関連するかどうか、教育の成果を量る尺度になる。在学中の学びの質と量を測る尺度の一つが卒業後の生活や職業活動である。以上を視野に入れた実践が学生の各自の経験の総体を意識した取り組みを生む。

学生は白紙状態で入学するのではない。入学までの学習の履歴＝経験の総体を抱えて入学する。学生の成育歴の中で学生個々の経験が学びの質を主導する。有機的な学びの経験は、さらに質の高い学びを求める。他方、機械的な学びや成育歴の中での経験が深刻な場合は、学びにより高い質を求める方向で対応すべきであらう。

その意味では、課題を抱えた学生からの直接・間接、あるいは意識的・無意識的な問いに誠実に応答する大学の構成員であらうとすることは、大学を言葉の

* 本学元教員

本来の意味で「面倒味のいい大学」「学生が成長する大学」になり続ける、社会的責任を果たし得る大学としての姿である⁴⁾。経験の総体がいかなるものであれ、それらが個々の学生、あるいは学生集団にとって意味あるものとして位置づくような学びが生まれる大学である。厳しい自らの境遇を自己責任と誤って捉える者は、叩かれまいと無難な学びを続ける。一方、冷徹な現実と向き合う人は、反転のために本質的な学びを始める。それゆえに、無難な学びではなく、本質的な学びへと励ます関わりが必要となる。

(2) 教員の位置 教員は自らの教育歴・研究歴を含む学習の履歴＝経験の総体を生きて学生に相対する。より多種多様な教員集団が集う大学は知の共同体としての魅力を発揮する。教員は大学の一員として大学教育の一端を担う。担当科目の教授活動がその最大のものである。それゆえ、私学の建学の精神と相まって大学教育の目的実現をめざして他授業との連関が意識される。学び手の内部において、それらが総合化される。各科目が全体として有機的に関連して意味を持つ。教員個々は担当科目の独自性と他科目との関連を自覚することが必須である。総体としての教育力である。

その意味で筆者が手応えを感じていたのは、本学本学科内での集中学科会（後述）であり、FD教員研修会であった⁵⁾。ともに大学における教員としての位置を自覚させた。公開授業担当教員は担当科目の独自性をもとに授業展開上の工夫を論述する。研究協議という協同作業のなかでお互いに同僚への疑問・批判と応答を繰り返し、教員としての資質向上を図ろうとしてきた。しかし、そこでは教員の身体性に関する協議は為されなかった。そのような視点や自覚がなかったということでもあろう。実践への疑問や批判、問いかけは、最終的には教員自身の身体のある様子をまで繋がっていくはずだが、教員集団としてその次元には至っていなかったということなのだろうか。

(3) 時代や社会への応答 人は真空に存在するのではない。生身の身体として生きた時代や社会から影響を受けつつ、学びを通して時代や社会へ関与していく。身体のある様子は常に問われる。自己・他者・世界・自然からである。死者や未来世代からも問われる。核汚染を含む地球環境汚染、経済的文化的不平等の深刻化、大量の難民の増加等、地球規模の課題は継続的な課題である。コロナ禍という世界規模の課題も生じた。

法学者小林直樹は晩年に総合人間学会を立ち上げ、精力的に活動した。『暴力の人間学的考察』（岩波書店、2011年）もその一冊である。諸問題の根幹にあるのは、人間の暴力の問題である。小林は最終的に暴力世界の克服に教育への期待を述べる。鍵になるものとして「教育と学習＝自己訓練」「対話による他者理解－共生への通路」「寛容と連帯」を上げる⁶⁾。

共通の世界的諸課題の解決に向けて、力を合わせて取り組む連帯・相互扶助の境地に互いを高めていく。一人ひとりの、あるいは市民総体の学習の履歴＝経験の総体は、現下の諸課題を解決する意思と能力とを獲得する責を負う。低次元・負の次元のことがらが相次ぐ国家や社会の構成員として現実直視が喫緊の課題である。見て見ぬ振りが寛容と連帯の意識を低下させる。それが限界を超えると、後戻りできない次元へと悪化するの歴史の教訓である。

加えて現下の象徴的な事例（2019年）としての児童虐待。被害者となった10歳の少女からの悲痛なSOSに応えられなかった現代日本。加害者や当局への非難だけでは類似の事件は再発する。今次の事件は、これまでの類似の事件の何回目の再発だろうか。救えなかった側としての痛みは再発防止への具体的行動に繋がる。供養の一環である。子どもの権利条約が言う、「子どもの最善の利益」保障はどこまで具現化されているのか⁷⁾。

こうした課題は、昨今の政治や一部企業の劣化と無関係ではない。劣化は誠実にことがらをなしていれば、本来は起こりえない低次元のことがらである。国家や社会は低次元の部分から腐敗・崩壊を始める。人間の内面から発露される言の葉が邪険にされる程度分、社会は腐敗し、崩壊する。「お答えは差し控える」発言は、その一端である。座視は腐敗・崩壊を加速させる。土竜の一穴が堤防を決壊させる。防ぎうる低次元のことがらは放置しない。社会の腐敗・崩壊を食い止めている人びとは、一様に自らの職務に誠実に当たっている⁸⁾。

こうした社会的な課題に授業や大学はどこまで応えているのか。大人を生き始めた大学生が現代社会の実相を理解する力をいかに獲得し、それをどう乗り越えるか。加害者側の大人と地続きの自己を直視することから始めたい。実時間分の責任を社会に対して負っているという自覚である。「個人的なことは政治的なことである」。日常的な諸課題は全て政治的な問題である。それ故、諸課題の解決には質の高い政治が必要であり、質の高い政治は質の高い主権者が生み出す。質の高い教育が鍵となる。

その意味では日本の最優先課題とは、政治の貧困を是正する質の高い教育を生むための政策であろう。しかしながら、学校教員の足元には超多忙な勤務実態という、国際的にも不名誉な現実がある。政策立案中央は質の高い教育を本能的に忌避する習性があるのだろうか。

ことがらは教職員にとっての不幸に留まらない。児童・生徒にとっての不幸でもある。選挙権のない子ども市民に対する大人市民からの冷たい仕打ちである。これまでこの問題を等閑視してきた選挙民の認識不足である。解決策はこの国の将来に責任と希望を持つべき、こうした事実を常に「政治問題」にすることであ

る。そこから改善へ向けての抜本的な解決策が生まれ、政策化される。政策化されなければ、論議は空転する。2010年の社会学者熊沢誠の警鐘はここを鋭く衝いたものだが、等閑視されてきた⁹⁾。

本年（2020）末、コロナ禍が西欧諸国から30年以上も遅れていた日本の35人学級の実現によりやがて舵を切る契機となった。それは同時に、質の高い教員が要請されるということでもある。大学教育・教職課程教育の社会的使命の正念場ともなる。

2. 学生の主体性を支える授業

(1) 2016年の学生報告 光は足元にある。その一つが本学保育学生二年次生5名による共同研究である¹⁰⁾。子どもの権利条約が言う、「子どもの最善の利益」保障を担う、保育学生としての主体的な学びをいかに作り上げていくかを共通課題とした。志の高さが生む、繋がる学び・架橋する学びの必要性を学生は強調する。それは身体全体での学びを意味する。あらゆる社会的なことがらは人間の営みである。保育場面のみならず、保育や保護者等を取り巻く社会的歴史的問題から国際的な諸問題にまで視野を広げていく学びが想定される。今回のコロナ禍でも明らかになったように、地球時代下、単独で自国の問題の発生と解決が可能な時代ではない。厄災は即座に地球を覆う。小林が90歳の時点で総合的に論じた主題が全て対象となる。

学生の共同研究の真骨頂は後半部分である。学生からみた、主体性を発揮する上での大学授業の要素分析である。質の高い学びは質の高い授業を要請する。結果は多様な様相と共通の課題とを示す。学生の共同研究が示す具体的な項目は、学生のみならず、教員の授業をはじめ生き方にまで迫る資料である。大学当局による教員の勤務評定表ではない。しかし、より深く解明されているが故に活用されるべき資料である¹¹⁾。

共通に実行されている項目、少数の授業で実行されている項目、一部の授業でのみ実行されている項目とに大別できる。アクティブ・ラーニングの実現を目指す授業はおしなべて重要な項目を実施している。大学教育の面目躍如である。他方、テキスト指定、印刷資料配布、本の紹介等は、少数である。ノート提出とフィードバック、課題提出とフィードバック、筆記試験実施とフィードバックの3項目は一人だけである。

(2) 自己直視としての学び 当初、学生が上げた項目の中には「フィードバック」の項目はなかった。学びは自己の学びの直視から始まる。次元が上がる。ノート、課題、筆記試験のいずれも、学生自身が直視しなければ意味がない。単位取得が主眼ではない。実社会では学びの質が問われる。教員として学生への責任を果たすには、課題や試験へのフィードバックは不可欠である。筆記試験へのそれは、採点後の答案の返却が前提となる。概略の説明では自己直視にならない。自己直視とは答案という自己の作品との向き合い

を意味する。卒業までに自己直視の機会をどれだけ保障できるか。これが大学教員の評価となる¹²⁾。なお、筆者の授業計画では、14回目が筆記試験、15回目が試験の後始末を兼ねた授業の総括となる。

人は、厳しいが見捨てない・受け止める人あってこそ、育つ。具体的な根拠のある厳しさは、人が育つ。心構え主義・根性論風情の厳しさとは異なる。教育は対人援助・発達支援職である。「ひとしく」「その能力に応じて」の具体化である。教員にはそのための資質能力が必要となる。教育活動における総合力である。個々の子どもの「その」個別具体的な事実を成育歴・歴史的な背景と絡めて理解しようとする営みをもって最適な関わりが生まれる。

(3) 学生が項目化しなかった要素 教員の資質・能力に不可欠な省察性・同僚性・協働性については、学生は一年次必修科目において本学本学科『初等教育学入門』等を用いて学習している。学生が項目化したのはこれらが具体化され、可視化されたからである。

他方、教育実践において必須となる、身体性・直接性・関係性・応答性・一回性等は、主体的で対話的な深い学びを生む上で重要である。これらが授業の中で学生に感得されるには相応の観察眼が必要になる。事前に、あるいは事中・事後にこれらを観察を通して理解することが必要になる¹³⁾。それらを項目化するには工夫を要する。例えば、その場・状況に相応しい説明をする、説明されているような生き方をしている、学生の実態に即した対応をする、一つひとつのことを大事にしている、等である。教員の実践はこれらすべてが教員の身体のありようとして具現化する。当事者性でもある。

学びは身体を通してなされる。身体を通して学びは個別具体化する。関係は生身と生身との間でなされる。有機的な時空が生まれる。それゆえ、相互に身振り・手ぶり・表情・息遣い・身のこなし・発せられた言葉の情感等々、相互に理解する手掛かりを最大限活用する。思いを最大限、これらの身体表現の中に込める。身体表現から理解しようとする。最適な応答を試みる。

教育実践は生身と生身との間でなされる、関係性・応答性の世界である。身体性が持つ重要性を自覚して、それを磨き続ける時空を大学が保障する時代になった。関係は自他の発信を聴くことから始まる。自らの内面の思いを聴いて発信する。相手の発信を聴いて、応答する。この繰り返しである。

1990年代の頃から話題になって来た「キレル」「ムカつく」身体は、自身の感情を最も的確に表現する言葉・手法が不明なために起きる。自分の内面を最も的確に表現できた時に人は身体の喜びを感じる。浄化でもある。内面と表現との関係が理解された分、学びは確かなものとなる。

3. 大学教育の質保証

(1) 在学中の教育の質保証 在学中の教育成果の一端は担当科目の評価によって得られる。各学年時の総合的評価は、学外実習等の学びによってその一端が見える。それ故に実習指導教員でなくとも、学内報告会への参加は重要になる。担当科目の評価、事後指導の手掛かりあるいは上学年授業への示唆が得られる。そこでは具体的な知識・技術の面のみならず、それらが活用される上での児童理解、対応能力、学習姿勢、時代・背景理解等、全体的な課題が見えてくる。

大学教育は日本国憲法の理念および1947年教育基本法・2006年教育基本法が強調する教育の条理や原理に即して実施される。教育基本法の理念を建学の理念に置く本学は、日本国憲法が謳う基本的理念の実現を「理想の実現は、根本において教育の力に待つべきもの」(教育基本法前文)と教育の力への信頼を示し、多文化共生の理念を先取りするような文言「普遍的にしてしかも個性豊かな文化の創造」をめざす教育の普及徹底(同)を意識していた。国連の人権関係の諸条約、とりわけ子どもの権利条約は「子どもの最善の利益」を謳う。

これらを土台とした実践がどこまで具現化されるか。教員の、また、大学教育の質保証となる。大学教育がなすべきは、高い専門性と豊かな人間性を学生自身が育み続ける志とそのための能力の形成への持続的な関与である。民主的主権者の育成である。内外の難題を含む、社会事象への関心は社会を通して時代・社会・人間等を総合的に捉える視点を生む。学びの範囲の広さは質の高さに繋がる。持続する学びをも生む。

上記学生の共同研究は、在学中から既に質保証を学生自らが達成している。光は足元にあるという所以である。象徴としての彼女たちのその後の学びに括目したい。実践報告の投稿を鶴首して待ちたい。

(2) 卒業後の質保証 卒業後のそれは実社会という共通の尺度による評価が行われる。個々の教員は大学教育の質保証に関わって全面的に責任を持つことはできない。しかし、担当科目分の責任は最低限、引き受けることは絶対条件である。無責任体制の風潮がこの国の土壌化している。まずは、隗より始めよ、である。卒業生において大学での学びはどう生きているのか、いないのか。それは何か、なぜか、どう克服するか。卒業生による生活や仕事をめぐる実践記録は大学教育の質保証を量る尺度になる。就職率は全国共通の量的な尺度だが、質的な尺度の一つが卒業生の実践であり、その報告である¹⁴⁾。

4. 教育学関連授業の質向上

(1) 時代・社会への応答と実践の対象化 大学教育の質保証は授業の絶えざる質向上を要請する。教育学は総合的実践的人間学である。人間を歴史的社会的存在として総合的に捉え、自らの理想的な人間像に向

けての道行きを支え、励ます実践的な学である。一面の人材像に基づく強制的な営みや解釈的なそれとは対極的である。それゆえ授業における時代・社会への応答は学生への応答でもある。自己・他者・世界・自然への最大限の責任を果たせるような学生が育つことを意識しての実践である。ゆえに自ら自戒しつつ、多種多様な経験、各種資料館での資料収集、実地訪問、本読み等を重ねる中で、常に自分の身体の反応を意識し応答性を磨くことを意識してきた。現在進行形の時事問題への見方を深めることは授業の質を高める。自らの五感を研ぐ作業でもある。後知恵ばかりでは精神が弛む。

学生と共有すべき事実は多々提示する。国際 NGO 報告によると、資産上位26人＝下位38億人という数字は象徴的な一例である(朝日新聞、2019年1月23日付)。学生の中に顕在化・潜在化する時代や社会の課題を見出すべく、筆者は授業という日常の学びのなかで学生の内面世界を表現する機会を保障してきた。学生の内面世界は時代や社会の課題であることに気づく契機とするためである。筆者が時事問題を授業と絡めて展開してきたのは、現在進行形の問題の解決に授業がどう関わるのか、当事者性をもって学ぶことを励ます観点からである。時事問題が時代と社会を映し出す。現下の課題に対峙することのない授業は、本人に責任のない不条理からの解放をめざす学問である教育学の担当者としては失格であろう。

教員は自身の実践を対象化する作業を通して自己更新を続ける。実践の文字化は成果と課題を明確にする。対象化作業とは自己直視であり、自省であり、厳しさを伴う。専門家としての矜持である。このことを意識して、筆者は蕪雑ながら授業実践を報告してきた¹⁵⁾。自己の対象化作業はさらなる課題である。

(2) 筆者の授業の独自性 授業の土台となる教育基本法の理念の具体化として、一人ひとりが個と社会との相互関係を生きるには、自己直視と時代・社会直視とが必要になる。自己直視は必然的に時代・社会直視になる。学びを身体に刻み込む次元にまで到達したかどうか。

筆者の授業の土台にあるのはオープンアプローチという授業観である。伝統的アプローチやプロセスアプローチではない。学びの素材は学生・教員の周辺にある。各自素材にどう対峙するか。それぞれの経験の総体をもとに議論される。実年数分の見識に到達しているか。相対的に不足する実年数を感性等でいかに補うか。実年数分の見識はその責任分の裏付けがあるかどうか。若い分だけの手垢にまみれない、新鮮さ・鋭さがあるかどうか。真剣勝負の世界である。退職年(2015)に報告した「応答する身体」という主題に込めた取り組みである。退職後の生活と活動を含めた報告については、他日を期したい。

既述した教員の多忙化についての社会の甘い対応

は、教員の仕事を授業時間に限定しているからか。教育の現実と本質を知らない者の限界なのだろうか。その限界・認識の不十分さを実感してもらうには引き続き社会発信が必須となる。専門性を活かした実践報告の作成である¹⁶⁾。次世代育成に従事する、本来は最も創造的な営みである職業がその超多忙さゆえに本来の職務遂行を困難にしているという事実を微力ながら改善するためである。政治の貧困を打破する喫緊の課題としてである。

教育が社会的共通資本であるという認識を社会全体で共有し、具体化するしか将来はない。税金という納税者からの公費の賢明な活用・再分配によって簡単に克服できる、極めて低次元の「国難」である。喫緊の課題に着手できないほどの状況はあるのだろうか。人間の安全保障という観点に立たないがゆえに賢明な優先順位感覚が機能していない。難題の解決は状況適応型の学びではなく、状況変革型の学びが生む¹⁷⁾。

(3) 学びの作品化・身体化 筆者は自己直視のために日常の学びの足跡を可視化することにも意を用いてきた。学びの作品化である¹⁸⁾。最大のものが自己形成史を踏まえた卒業論文の作成であろう。人生という作品の中で直面した主題を卒業論文という形でより自覚的に作品化する作業であった。他方、音楽リズムやダンスのように、身体表現の次元での展開はない。役割演技を通して、関係者の内面理解を試みる作業は適宜、導入してきた。学びが身体に刻まれるためには、内面に訴える、響くような資料の提示が不可欠である。資料の質は授業の導入と展開、更には、次回への繋がりを決める要素となった。学生の共同報告がいう、「当事者性」「時代や社会との繋がりに」である。

当事者性は研究対象となった全授業で意識されているが、時代や社会との繋がりは、半数の授業に留まる。当事者性それ自体も教員による濃淡はある。複数の新聞記事を比較検討する NIE（「教育に新聞を」）も早くから取り入れてきた。筆者にとって大学購読の複数の新聞は日々の教材検索の日課であった。本や絵本の紹介も現物を提示し、核心部分を示す努力が続けた。ノートに形としては残る。副産物として学生による新聞投稿が続いたことは内面的な育ちが形になった一例である。学びの身体化とは生活化でもある。民主主義の主権者としての生き方である。

筆者が大学で実施してきたこうした手法は小学校で活用できることばかりである。卒業生が日々の実践のなかでどこまで批判的に做っているか。教育の質保証とは、真似びたい内容と方法、生き方があったかどうかによる。遠慮のない厳正な評価が下される。

(4) 実習との関わり 教育原理や保育原理といった原理系の授業を担当し、同時に教育実習担当者であったことは筆者にとって幸いであった。学生の学びのなかで理論と実践との融合がいかになされるのか、相互循環を妨げるものは何か。各授業相互、大学での

学びと学外での学びを架橋する学びを実地に具体化するためである。佐伯と共に教育実習記録帳を読み、成果と課題をその都度明らかにせんとしたのは、その作業に手応えがあったからである。実習の学内報告会の前後に報告書や質疑応答をもとに筆者の気付きや疑問等を作成して配布した。実習での学びの手応えに対する筆者なりの応答である。それらは、佐伯との共同報告のなかに資料として掲載した。

小学校教育実習や保育実習、幼稚園教育実習等の報告会では、同じ報告を元に学生・教員がともに質問し、私見を開陳しあった。私見は確かな根拠に基づくものであるかどうかを問われる。担当授業での学びとの関係も問われる。学生にとっては、多様な見解があること、それぞれに根拠があることを発見する機会となったであろう。学生と教員間の丁々発止のやり取りも学生の成長ゆえに可能となった。参加教員にとっては、学生の学びの現状と課題の一端が分かる貴重な場であった。担当教員に限らず、関係教員全員が参加できる条件整備が必要なほどの深い学びの時間であった。研修の時間でもあった。学生にとっては、学びを通した横の関係、縦の関係のいずれもが深まる時間であった。学びの共同体の一員であることを実感する時空でもあったであろう。真理を探究する者同士として対等に論議しあう時空を体験することは、性差別が今なお残るこの国で自覚的な生活と仕事を続ける上で一つの財産となるに相違ない。

おわりに―筆者を励ますもの―

(1) 「応答する身体」を生きる 筆者は退職の身である。哀しいかな、68年間の9割以上を学校という時空の中で無難に生きてきたことの垢だろうか。他の道が見えない。「応答する身体」に倣っていえば、足元も世界も自然も応答を要することばかりである。実年数分の責任と後から来る者への希望とを託す作業。これが筆者を励ます。子ども時代の貧困の体験が社会的問題への疑義を生んだ。筆者のルサンチマンである¹⁹⁾。諸課題は筆者への叱咤激励でもある。グレッタ・トゥーンベリをはじめとする若き社会活動家たちの存在も筆者の背中を押す。

筆者にとって最大の退職効果は時間的余裕である²⁰⁾。多忙は本質への目を曇らせる。閑暇は振り返りを生む。為しえたことよりも、力不足であったことが見えた。生き方は一つの芸術である。人生は自分の一生を自己という経糸と他者という横糸を紡ぎ合わせる織物と似ている。あらゆる授業は芸術的営みの一つでもある。人生を、自分の肉体を使い切る人生は究極の環境仕様である。あるがまま・ありのままの人生は、他と較べない、業績評定に一喜一憂しない。樹木希林の生き方でもある。最期の評価は関わった他者が行う。今後、実時間を重ねることによって学校時間の意味を相対化し続けることができよう。自己の相対化で

ある。他者との出会いは自己相対化の機会となる。遠近を問わず他者はすべて自己を映し出す鏡である。単一・画一的ではなく多様・多面的な鏡と出會いたい。それは共通性と多様性の確認作業となる。2分間の報告者との直の出会いは刺激となった²¹⁾。

(2) 経験の総体の拡充 身体表現の元になるものは、各自のこれまでの経験の総体である。喜怒哀楽等、自身の感情を最的確に表現するにはどのようにすればいいか。どのような表現が最的確な感情の表現になるのか。この点の飽くなき追求である。自分の内面を最的確に表現できた時に人は身体の喜びを感じる。怒り・苦悩・悲嘆・哀歎等、表現が極めて困難な局面において、これまで授業はもとより、生活や仕事のなかで学んできた表現に向けての心の動きや身体への反応等が自然に立ち現われてくる。その意味では、あらゆる文芸等に触れること、多様な他者や場所との出会いは、直接・間接の大事な経験となる。他者の学問的成果からの学びも経験の総体を広げる。

筆者は被害者支援活動に関わり始めて3年になる。既に「発達被害者学」といった学問が誕生していることも自己研修の中で知った。「さまざまな被害の分野の細分化を統一し、総合的に理解し、また、高度なレベルの研究をめざす」²²⁾ 学問である。政策決定に活用されることを視野にした先駆的な学問のひとつである。政策決定への活用は学問成果に対する政策側の尊敬から始まる。

現職時代にいじめ、虐待、学校暴力等を構造的に把握し、それをもとにした実践を展開していき、世直しの一役を担う学びを授業で扱ってはきた。だが、本書は未読であった。質の高い授業展開に際して限られた時間・精力・資金をどう配分するか。専門性と人間性を高めるための経験の総体を広げる不断の努力が可能になるような条件整備は必須である。多忙化は授業や教育の質を下げる。

(3) 共通性と多様性 大学教員は共通の土台・理念に基づく実践を行う。当然、具体的な事例への応答は多様性がある。学生の共同研究が示した通りである。教員各自の成育歴・学習歴・教育歴・研究歴等の経験の総体ゆえである。共通性と多様性を踏まえた質の高い実践が大学を大学にする。共通性を踏まえた多様性の質を高める研修の機会が必要になる。

本学科では、FD研修会の一環として同僚の授業を参観し、研究協議する取り組みを実施してきた。授業の公開・研究協議の時間を持つことは大学教育の在り方を問い続ける大事な作業であった。1授業時間の授業公開以上に、授業の全体が明らかになる。評価、その材料、成果、課題等が叙述されているはずである。徹底した研究協議は同僚性の観点から大事である。

教員には、数年に一度の頻度で授業実践を報告する雰囲気や醸成されるならば、学生にとっても自己直視の優れた見本となろう。逆に言えば、原則論だけの開

陳は、研究協議の材料としては不足感がある。原則論は基本的に共通の土台に立っている。実践力とは、原則をどのように状況に即して具体化するかである。そこにその教員の身体性をはじめ、すべてが出てくる。表出されるから学びの材料になる。吟味と浄化の過程でもあろう。その意味では、小文で言及した学生の報告は、教育実践力の元になるものを問うたものである。学生は、自らが発見したことを一つの事例として自身の実践に活かすであろう。

(4) 実践における世界像・社会像 実践は何を目指し、何を根拠にしたものなのか。実践は常に実践者にその拠って立つ世界像・社会像を問う。

筆者が依拠している世界像は、1947年教育基本法前文の「普遍的にしてしかも個性豊かな文化の創造」という文言に込められた教育基本法の理想がめざそうとしているものである。筆者はその初志に軸足を置いている。教育の目的が未完のプロジェクトであり、理想の実現への道行きが永遠に未完であることからとも言える。未完であって当然である。生身の身。凡愚ゆえ愚直・実直・誠実にやり続けるほかない。指針が定かであれば、迷走はない。身体は自ずと指針を目指す。生命体は自滅のDNAを内蔵してはいない。そのような身体を日々、葛藤を抱えつつ生きることが世界像・社会像を実践において具体化することになる。逆に迷走や暴走は指針が定かでないからか。葛藤を避けているからか。あるいは独善的な指針に基づくからか。

幸いそれぞれの時代の碩学によるお手本はある。誤魔化しを生きる者には、それらは眩し過ぎて、無視したくなるのだろうか。ある首相は「私は総理大臣なんですから」と言い放った。謙虚さを欠くと人は他から学ばない。学べない。周囲は付度で固められる。謙虚とは真逆の暴走の世界と随す。「逆命利君」は不在である。本来、人はその実年数分の責任を時代や社会・未来・過去に対して負っている。このことの自覚からことは始まる。自己・他者・世界・自然に対する最大限の責任を果たし続ける生き方である。何が分水嶺となるのだろうか。

それでも社会は変わりつつある。筆者も蝸牛の歩みに倣って変わりつつある。人びとの思いが世の中を動かす一例である。本学創設者が建学に際して依拠した1947年教育基本法の理念を土台に、保育所保育指針が「総則」でいう保育の原理「幼児が現在を最もよく生き、望ましい未来を作る力の基礎を培う」という文言に倣って、子どもを含むあらゆる市民が「現在を最もよく生き、望ましい未来を作る力」を発揮しながら民主主義社会の主権者としての営みを続けることが民主的自律の主権者の責務であろう。

本学の建学の精神・学園訓の第3項「謙虚で優雅な人になりましょう」とは、生あるものの存在の根拠を知る人である。生物多様性を大事にする、いのちや生態系を大事にする人でもある。社会的包摂や多様性・

寛容もここから生まれる。授業は須くここを基盤に置くべきだろう。普遍性を重視した本学園創設者の先見の明である²³⁾。

(5) 同志的關係を生きる 学びの証は、自分の中に行動指針として血肉化しているものは何かという問いである。50歳代の時分では意識しえなかった。生き永らえることは次第に見えてくる世界があるという発見を生む。誕生以後、常に新たな経験と、経験の再構成を生きている。自他ともにである。

同志的關係を生きる秘訣は単純である。最適な例が本学科が実施している集中学科会である²⁴⁾。倉田侃司元学科長時代に始まった取り組みである。3日間に及ぶ、現状と課題を明らかにし、解決策を探る、文字通り、課題解決に向き合う学科挙げての内発的な自己評価作業であった。教務、実習、進路、チューター制、等々、学科運営に関わるあらゆる主題が分担作業で報告され、活発な協議が展開された。一種、学会発表的なものであった。専門家集団による自律的な取り組みでもあった。地道ながら教育の王道を歩んできたといえる。協議の根底にあったのは学生に対する応答責任をどう果たすかという実践的な問いであった。学生の実態にどう向き合うか。協議主題は結果的に、学生の進路選択に直結する授業力・指導力の向上をめぐるものとなることとなった。

4半世紀本学に関わった筆者にとっては、集中学科会は大学教員としての在り方を鍛えられた経験であった²⁵⁾。その伝統は受け継がれてきている。本学本学科『初等教育学入門』（広島文教女子大学、2010年）は、学科の教育目標、教育内容、実習、野外活動、学生の日常活動等を網羅的に概観した、新入生への学科の指針書である。集中学科会という学科挙げての研修という伝統の中で生まれた成果の一つである。

渡部は職場としての学校を教育専門家のコミュニティと捉え、コミュニティに3つの側面を描く。「談話のコミュニティ」「実践のコミュニティ」「実践研究のコミュニティ」である²⁶⁾。図らずも本学科はそれらを実践してきていた。さらに、発展進化することが建学の精神の土着化と現代化に繋がる。

本学部教育学部への改組は新たな門出である。これまでの文学部・人間科学部時代の本学科が成し得た成果と課題を明確にすることは、教育学が文化遺産の継承と発展に関わる意図的・目的営みについて学問的に研究する学問であることを踏まえても不可避の作業となる。短期大学部幼児教育学科時代の会員も含めると、旧現会員は1万人になるのだろうか。本学会の総力を挙げて、昨今の諸般の課題の解決に向けて取り組むことは、創設者の熱い願いに応えることになるだろう。志の高い普遍的な建学の精神を持つ私学の教育に携わった者の醍醐味である。学生や卒業生も同様であろう。創設者たちの志を間近に感じることのできた教職員の一人として同志的關係を生きたい。

(2019.2.6./2020.12.20)

註

1) 藤本和子『塩を食う女たち一覽書・北米の黒人女性』岩波書店、2018年、118頁。「塩食い共同体」を生きる人びとの箴言である。50年前、点取り競争に囚われていた高校時代の筆者の前に教師は現れていたのだろうか。そもそも心の準備は整っていたのだろうか。

2) こうした風土は、1945年8月の敗戦後の日本の行く末を案じ、若き女性に対する真実に徹した生き方の育成が未曾有の危機を克服することになるとして命を賭して「教育に生き、教育に死す」生涯を遂げた広島文教女子大学（2019年度以降、共学化。以下、本学）創設者武田ミキの志が土壌として生きていることの証であろう。40歳で着任した筆者も含めて、創設者と間近で学びの時空を共有できたことが大きい。創設者の身体が発する教育力は学園に浸透していた。率先垂範は無論、最期まで学生に直に語り続けた武田ミキの生涯と思想・実践の一端は、広島文教女子大学教育研究所編『武田ミキ人間教育論』溪水社、1992年。

3) 言わずもがなのことながら、教員の基本的な立場として学生の不足は責めない。背景を理解する努力を重ねつつ、解決の方途を共に模索し、そのための行動力を高める。これが教員としての実践力を鍛える。本学初等教育学科の教育目標、「逞しい実践力のある教員」としての姿であろう。時代や社会、いわんや学生や家庭への責任転嫁ではことは成就しない。そのような時代や社会を作ってきた実年数分の責任の一端を引き受ける姿勢から直視しは始まる。それはまた、学生が出会う新しい世代に対する基本的な姿勢ともなる。例えば、読書量が絶対的に少ない学生の実態の前に自身の読書体験等を紹介するなど、読書への誘いを図る。自己肯定感の乏しい学生に対しては、自己卑下ではなく、それが時代や社会との関係の中で生まれた実態であることに気付き、克服するための手法と能力を共に作り出す。負からの取り組みは相応の力量を要する。学生の集団としての力も活用する。その分、手応えは大きい。長期的にみれば社会は着実に進歩している。本人に責任のない不条理の苦痛を、本人への自己責任に負わせずに社会全体で捉えていこうとする世界的な潮流はその表れである。BLM（Black Lives Matter「黒人の命は、私（達）の問題である」）運動はその象徴である。「黒人の命も大事」という、紹介の仕方は本質をどこまで捉えているのだろうか。

4) 社会的に困難な状況に置かれてきた高校生を一定数入学させる独自の入学選抜制度を実施する大学もある。学力は本人の努力と本人の家庭の経済力・文化力との相乗効果によって結果する。社会的経済的文化的に困難な状況を生きてきた彼らは学びへの渴望や熱意は半端ではない。学ぶということは、学ぶことのできない人のために何ができるかを考え、行動することである。この言葉を心底実感しながら生きてきた人である。苦難の中を教育によって人生を作り続けてきた本学創設者の思いそのものである。社会的配慮のもと、本学で武田ミキが高調した「性能伸長教育」を生きて、自分なりの人生を生きていくことだけでよい。卒業後、武田ミキの志を生きた後継者が続出している。本学での学びを社会に発信したいとの思いから、次世代への教育に関わる関係者になっている者も多い。場合によっては学校の創設者もでてきよう。

5) FD 研修会が制度化される以前から筆者は志を同じくする同僚との間で授業の相互参観を行ってきた。授業後のやり取りは自発的な参加であった分、徹底していた。自律的な学びが相互を磨く。

6) 小林直樹『暴力の人間学的考察』岩波書店、2011年、309-313頁。

7) 他方、同時期に発覚した女子大学生の殺害事件。「掲示板」で知り合った人物に会いに行き、事件に巻き込まれた。現代日本を象徴する事件である。2020年12月追記する時点で、どの事件であったか不明となった。次々に上書きされていくため、記憶が追いつかない。いずれも加害者側は大人である。社会的な虐待の一端である。

なお、学生との関係性の基本形は、本田哲郎『釜ヶ崎と福音—神は貧しく小さくされた者と共に』(岩波現代文庫、2013年、岩波書店、2006年)が示唆的である。vi頁「サービスをする側ではなく／サービスを受けねばならない側に、／主はおられる」。理解がunderstand(下に立つ)であることも象徴的である。「一致と平和の秘訣とは、いちばん小さくされている部分を最優先させることです」94頁。子どもの最善の利益を保证する社会創りが難題解決の手がかりとなる。藤本和子は北米の黒人女性への聞き書きを記す過程を「自らを生み出すためのプロセスの一面」という。前掲書、252頁。根源を生きる者の前に立つものは自然に自己直視を始める。

坂上香監督の映画『プリズン・サークル』(2019)もその一つ。回復共同体を実践するなかで受刑者が自らの加害と被害をサークルになって語り、聞く。観る側は椅子のひとつに座りたくなる。回復共同体への渴望だろうか。坂上香『ライファーズ—罪に向きあう』みすず書房、2012年では、坂上の感応する身体が文字化されている。映画は製作側の身体感の観る側が読解する。坂上自身がNHK ETV2001番組における戦時性暴力を巡る歴史法廷での官房副長官時代の安倍晋三議員による「政治的介入」に対して当事者的な対応をとったことは、坂上のその後の仕事に勁さを与えている。

8) ペストに立ち向かった医師は言う。「ペストと戦う唯一の方法は、誠実さということです」『僕の場合には、つまり自分の職務を果たすことだと心得ています』。カミュ・A／宮崎嶺雄訳『ペスト』新潮文庫、1969年、245頁。同様なことを教育哲学者大田堯も『教育とは何か』岩波新書、1990年の末尾で指摘した。212頁。「ただ単に、一つの大きなことがらと自己との活ける連帯関係を自覚したうえで、最小のことがらをも力を尽くしておこなえばそれでよいのです。」(ティヤール・ド・シャルダン)」。大田はその際、あらゆる生命が宇宙的生命への依存と参加という最重要事項である、事実を踏まえることの大切さを強調する。教育哲学の授業で教材とした一冊。卒業生の一人は、折に触れて読んでいたという。

9) 熊沢誠『過労死・過労自殺の現代史—働きすぎに斃れる人たち』岩波現代文庫、2018年、岩波書店、2010年、改題。「教師はいま、頻発するメンタルクライシスの果ての過労自殺がさして異常なできごとではない地点に立っている。教師たちのこのような心身の疲弊を視野に入れないままの教育問題の議論は、まことに虚妄(きやうまう)というほかはない」155頁。実際、虚妄なまま教育問題の議論は展開されてきた。虚妄はいかなる実利をも生まない。

新型コロナウイルスへの日本の対応を「日本モデル」として自画自賛する関係者もいた。麻生太郎副総理は科学的根拠もなく

「民度が違う」と宣うた。「第三波」下、逼迫する医療・介護関係者への抜本的な手立ては後手後手に回っている。ここにあるのは現場がさらに頑張れば局面は打開される、持ち堪えられるという、根拠なき精神論ではないだろうか。75年前に崩壊した大日本帝国の首脳部が十五年戦争の中で科学的合理性ではなく、精神論で臣民を盛んに煽った歴史的事実との相似形がある。敗戦後は、臣民ではなく国民と根本的に変わった。「学問の自由」が日本国憲法に謳われたことに象徴されるとおりである。国家政策への合理的科学的普遍の本質的批判が展開されてきた。にもかかわらず、日本社会は総体としては、未曾有の国難を招来した事実を学ぼうとしてこなかった一つの帰結だろう。

研究者・教育者として、その愚を歴史的に解明し、若き学徒と学び続けてきている歴史学者加藤陽子は、菅義偉首相から任命拒否された日本学術会議の推薦委員の一人である。『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』新潮文庫、2016年、朝日出版社、2009年は、教育史担当の筆者にも目から鱗の数々であった。加藤は「歴史の試験は論述で」、「論理的に説明できる力は暗記ではない」という。32頁。筆者の2015年度定年時の最後の授業となった教育史(集中講義)では、今井康雄編著『教育思想史』有斐閣、2010年をテキストとし、基礎事項と絡めた論述問題を出したとはいえ、加藤的には不十分だろう。市民としての合理的科学的普遍の本質的な意思と行動が求められている。その力を培う上で最適な一冊である。

10) 徳本達夫・井手佑希乃・沖野妃慧・藤田実希・藤本彩花・山本恵子「保育学生の主体的学習—質の高い学びを生む諸要素とその具体化—」広島文教女子大学『教職センター年報』第4号、2016年所収)。2015年の第56回中国四国保育学生研究大会での報告が研究の前半部分である。

11) 授業者から見れば、異論や異議もあるだろう。異論や異議は、次の段階へと進む契機となる。医療現場では患者学という学問が誕生して効果を上げている。患者が自身の病に向き合う主体性の回復である。患者と医者との協働性の始まりとなった。患者学に倣っていえば、今回の学生の研究は学生学の発想に立つ。学生自身の学びに向き合う主体性の回復である。教員や他の学生との協働性の始まりである。渡部淳『アクティブ・ラーニングとは何か』岩波新書、2020年は、「ことば」「もの」「身体」による表現の3つによる「学びの全身化」を目指すアクティブ・ラーニング型授業を提示する。130-1頁。学生たちの一連の研究過程は「学びの全身化」の一例と言える。

12) 授業開始時の「号令」も実施しないのは一人。授業開始5分前に、導入用資料の提示を設定して開始する。開始と同時に会釈と共に「それでは始めます。スクリーンの資料をご覧下さい」。これが筆者の挨拶を兼ねた指示である。学生は、授業の雰囲気に着くという点で「号令」は必要視している。はじめ・区別という観点だろう。だが、学びの時空はいつでも、どこにもある、という意味で学びの姿勢に自然に入り込めるような身体を身に付ける方が生涯に亘っての生きる力になる。学びの時空をいかに創るか。筆者なりの工夫である。自己直視の観点からである。「号令」に無自覚なまま従う身体を身に付けると、応用が効かないのではない。なお、学生のいう「授業の雰囲気」とは、「号令」によって授業に入るかどうかという意味での雰囲気である。授業時間全体の雰囲気ではない。学びの姿勢が自然な形で発揮されるのが、主体的

な身体性の姿であろう。例えば、アメリカの高校生の受講態度は日本人高校生と違って自由である。彼らの日常生活や学校生活とは連続している。

時間割表に基づき例えば「これから国語の授業を始めます」式の授業は、総合的学びを考えた授業なのか。科目の目標を達成する学びの動機付けとはいえ、「国語の授業的には云云、しかし、道徳の授業的にはかんぬん」のような学び手が育つ心配はないのだろうか。公立小学校教員鳥山敏子は、教科横断的総合的な授業を展開した一人であった（『からだが変わる授業が変わる』（晩成書房、1984年）、『いのちに触れる』（太郎次郎社、1986年）。鳥山自身の身体が総合的だったからであろう。読み継がれるべき哲学的実践書である。

示唆的なのは、小学4年生が小説を電子出版したという記事。国語の授業での教員の問い「登場人物の気持ちで正しいものは」への彼の応答。「読む人の視点によって違う」。至言である。読書量と質。自作の量と質。本質を見抜くほど成長する。（朝日新聞、「ひと」2019年1月31日付け）。記事が紹介する「母の活動を通じて知り合った、個性豊かな大人たちの存在や会話が、執筆のヒントになった」という。多様な他者との出会いの大きさである。同時に今なお、あのような教員の問いかけがあることの不思議。また、発達障害のある生徒に「こんな問題も解けないのか」となじった50歳代の女性教員（朝日新聞、2019年2月7日付け）。発問や発言に教員としての人となりが現れる。

自戒を込めて記す。複数の項目で筆者は他教員とは異なった対応をしていることが明確になった。空気を読む生き方をしていれば、対応を変えていただろうか。それはない。むしろ、論議の叩き台になるつもりで取り組んできた。筆者の身体的応答である。主体的で対話的な深い学びの時空には、教育の原理に即した複数の姿があることが大事になる。単一的画一的世界は人を育てない。学生は判断基準とその材料を獲得することを通してより次元的の高い学びへと至る。

13) 正規の授業ではない、教員採用試験対策講座の一環として担当した集団討論では、実地に集団討論の様子を観察させ、質の高い討論の在り方を決定づける要素を抽出させ、協議する中で確認する作業を課した（徳本達夫・佐伯育郎「教師教育における集団討論の意義と実践」(1) (2)『広島文教女子大学教職センター年報』第3号、2015年所収）。完成された地図を与えるのではなく、地図を作成する磁石に相当するものを活用する学びである。その分、自覚度は高まる。発見した分が自分の力になる。生身の学びの手応えである。受け身的な学びでは難しい。

新井紀子『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社、2018年）は、読解力を以て社会的・文化的な存在を生きてきた人間にとって、読解力を磨かなければ、AIに及ばないことを指摘した。協同活動の中で読解力と表現力とが育つ。主体的で対話的な授業例を数万ほどAI（人工知能）に記憶させても、AIはそのような授業を展開することはできない。学びの現場の文脈が読めないからである。将棋や囲碁の世界でのAIの活躍ぶりには目を見張るものがあるとはいえ、記憶する計算機にすぎない。したがって、記憶に頼るような筆記試験問題は、その時点でAIに敗北したことになる。教員はその専門性や倫理性、人間としての誇りに賭けても、試験問題の公表を通して、AIではない、人間にしかできない次元の教育活動を作り続けることが必要になる。

筆者は、担当科目のすべてで筆記試験問題を公開してきた。学生は試験対策として正解を書きだす。筆者の試験は本・ノート・資料等持ち込み自由であった（その後、電子機器は不可と特記することになった）。過去問の正解をもとに同じような文脈での設問にそのまま記入する。誤答となる。逆の文脈での設問としていたからである。痛い経験を経て、件の学生はその危険な学び方を卒業する。試験の後始末（フィードバック）の中で簡単に触れることで学びの在り方を共通理解にしていく。

14) 本学会の研究大会等の活用はその一つになる。研究大会では主に卒業生4名が報告する。卒業生現会員（10年会員及び継続会員）は1300人超になろうか。その内からの4名。報告できる力は保障されているはずである。同期生の報告への関心が会員の参加度を高める。参加できなかった会員のためにも報告は誌上で文字化する。研究大会での発表機会がない場合でも、投稿を勧める。本学会誌が本来の役割を担うことは本学会の責務である。現職でなくとも、実践とその後の人生とを絡めた報告は貴重である。幅広い講師選定が望まれる。研究の実践者でなければ、質の高い実践は困難である。研究の実践者たらんとすれば実践的研究者となる。実践と研究とは融合する。この意味からも本学会誌が卒業生の実践報告・生活報告を積極的に掲載する風土を醸し出し、定着させることに繋げたい。さすれば、本学科の新たな伝統となるだろう。

現状として「10年会員」後の会員継続が機能していないことは学会誌の魅力不足なのか。アンケート葉書を挟み、感想記入欄や読んでよかった・面白かった作品3つを回答する等の工夫は検討の余地がある。双方向性を持たせたい。また、学会誌は刊行後速やかに会員の手元に届けることが学会の活性化に繋がるのではない。なお、残念ながら直近2年間の卒業生のうち、「10年会員」登録者は7割程度である。何が起きているのか。経済的事情なのか。年会費1000円という廉価であっても会員としての価値を実感できないのだろうか。元教員として無関心ではいられない。筆者として為すべきことは応答する価値のある小文を届けることである。

15) 筆者の教員としての実践と絡めた報告『教師教育と教育実習—学びの質を高めるための原則と技法—』（2015年度広島文教女子大学教育・研究活動支援プログラム採択課題、佐伯育郎と共著）は、先の学生の共同研究への応答でもある。

16) 多忙な中で執筆した卒業生による実践報告への応援は必須である。投稿を励まし、支えることも大学教員の役割だろう。徳本達夫「保育者教育考（3）」（『広島文教教育』第34巻、2019年所収）は、その一例である。退職者である筆者には時間的余裕がある。卒業生から活用されるだけの力量を高めたい。筆者の呼びかけは、荒野からのそれではない。複数のゼミ卒業生には私信を届けた。志あらば、退職教員の活用も可能である。

17) 例えば、教育哲学という、科目名は同じであっても、授業の内容や方法は、担当者によって微妙に異なることは授業のシラバスが示す。いわんや、授業者の身体を通して実施される授業である。AI方式のそれとは違う。学生と教員とによって生成される授業の醍醐味である。あらゆる授業の土台に哲学がある、との発言は本質を突く。だが、それを実際に実践するかどうかは別のことである。お追従は追従であり、そこには哲学はない。哲学は自己を生きる者の上に降り立つ。（徳本達夫「教師教育と教育哲学授業」『広島文教女子大学紀

要』第50巻、2015年所収)。

18) 筆者の実践では、ノートやレポート等が各自の学びの作品である。筆者が授業ノート提出とそれへのフィードバックを重視したのはその認識からである。半期科目で30頁前後の作品になる。ノートには90分の内容からの学びが凝縮されている。板書を書き写す方式ではない。重要項目は教材提示機で図示する。授業時間内の質問は毎回最低でも3問。導入時、中間時、終結時と、学びの質が高まる流れを意識した。基礎知識に関する部分であっても、誤答は消さずに、赤ペン等で自己評価する。誤答の理由が分かる、誤答を直視する、学びが高まる。論述に関してはさらに徹底した。教員の補足説明を聞き、自分の回答に該当する部分があれば、下線部を引く、など自己添削である。自身を学びの主体へと育てる方策である。授業後は提出ノートを筆者は読み、学びの実態を確認する。基本的に15回この方式を繰り返す。時間と精力は人数分・ノート頁分、分量が増える(基本的に100名超の受講生)。それでも確実に成長する学生の姿や作品としてのノートがこの作業を続ける原動力となった。課題や筆記試験に関しても、趣旨は同様である。ノートを交換して学び合う学生の姿は授業者をさらに励ました。手書きノートには、問いと対話の過程が記録される。メモあり、文あり、イラスト・図あり、学生はそれぞれ工夫する。学生の授業短評と教員からの応答の資料(A3両面)は10枚以上である。なお、学び方の指針本は多々。追手門学院大学成熟社会研究所編『一人で思う、二人で語る、みんなで考える一実践! ロジコミ・メソッド』岩波ジュニア新書、2020年は秀れた簡便な一冊である。

19) 表現活動の原動力はルサンチマンである。表現者それぞれのルサンチマンは時代や社会との関係の中で構造的に明らかにすることなしには、単なる妄想となる。社会事象への深い関心がルサンチマンへの理解を深める。平板な理解は、共難共苦の時空に耐えられない。

社会を震撼させた2016年の相模原事件をめぐる作品は多々ある。植松聖被告のルサンチマンは今なお、不明である。辺見庸『月』(講談社、2018年)は、「きーちゃん」や「さとくん」他がその内奥まで赤裸々に語り、行動する。辺見の身体性が事件に肉薄する世界である分、読み手の「内なる優生思想」が問われ、苦しい作品である。作中人物の思いを筆者の身体的歴史年表に刻み付けたい。

本質理解は身体性を離れてはあり得ない。死刑制度を巡る青木理『絞首刑』講談社文庫、2012年。講談社、2009年は、文庫本のあとがきに記す。「極論を言えば、私自身が死刑囚の首に絞縄をかけ、執行ボタンを押し、宙吊りの遺体を処理する視座に立って見たかった。でなければ、死刑問題の本質は決して見えてこないと思った」と。331頁。

20) 多忙化は教員の身体を不感症にする。共感的想像力を枯渇させる。対処しきれなくなった過度なストレスは、自己への暴力や他者支配・暴力となって具体化する。最悪の場合、体罰や性暴力の被害者を生む。性暴力が性欲の発露ではなく、他者支配・自己優越性を感じるためにあることは周知の事実である。渡部淳も、アクティブ・ラーニング型授業の実現に関わって、行政の施策をめぐる危惧として、物理的条件の整備の不十分さ、現場教師への管理強化をあげる。前掲書、145-147頁。

21) 2分間を持つ意味を教えられた。東電福島第一原発事故避難者の関西訴訟原告団当事者の講演会場であった。国連

人権理事会本会議での発表は2分間。本質を突く、凝縮された発表。2分間でも十分であることの証。報告者がそのような日々を送ってきたことの証である。

NHK「クローズアップ現代」のキャスターを務めた国谷裕子も、当時の菅官房長官に「残り30秒での「しかし」」を發した時の心境を綴る。「事実を浮かび上がらせる、それがフェアなインタビューではないだろうか」と。『キャスターという仕事』岩波新書、2017年、168-175頁。2分間であれ、30秒であれ、時々刻々の実時間が持つ重みである。ここでも「応答する身体」の内実が問われる。日常生活に人となりや身体として浮かび上がる。誤魔化しが効かない。

学会の場で質問者に向き合わない発表者の身体に対して、学生のSOSは発信されるだろうか。5分の内容を20分かけて報告する無様も他山の石である。不必要に長い授業の導入も同様である。模擬授業において小学生対象の教材は大学生には既習事項である。だが、それがなぞり授業の言い訳にはならない。質の高い教材が授業者の自家薬籠中のものになっていれば、自ずと導入は限りなく短時間になる。中身に自信がないと、導入で時間稼ぎをする。時間稼ぎの身体は自らも嫌悪感を感じているのだろう。居心地の悪さが伝わってくる。「時間がありませんから」とは、言い訳の最たるもの。現在は3分方式が主流になりつつある。短時間に学び手を引き込む授業展開を学ぶことが王道になる。王道を歩めば道は拓かれる。学習内容を自家薬籠中のものにするには、授業者としての人間の感性を高めるしかない。さまざまな他者や作品に積極的に出合うことが必要になる。幅広い教養は授業の質を高める。現物に触れることは感動を生む。感動は学びの質を高める。学びの姿勢の高さは授業をさらなる高みに至らせる。相乗効果である。教員として表現活動という芸術を追及することと、教育という芸術を学生と共に体験することは、両輪ではなく、一体のものである。両者のバランスという問題ではなく、両者の融合の問題である。研究と修養とを可能にする諸条件整備が不可欠となる。なお、模擬授業指導に関しては徳本達夫・佐伯育郎「教師教育における模擬授業指導の現状と課題」(1)(2)『広島文教女子大学教職センター年報』第3号、2015年所収)。

22) デイビッド・フィンケルホー(編著)森田ゆり・金田ユリ子・定政由里子・森年恵(訳)『子ども被害者学のすすめ』岩波書店、2010年、35頁。

23) ベストに立ち向かう「りっぱな人間、(中略)とは、できるだけ気をゆるめない人間のことだ。しかも、そのためには、それこそよっぽどの意志と緊張をもって、(後略)」。カミュ、前掲書、376頁。「コロナ疲れ」に堕さないためには政策側による抜本的な最適・最善の政策の実施と市民相互の誠実な連帯意識が必須だろう。政策側は現場の篤農的な働きにいつも甘えていてはならない。

社会的動物である人間が最も学ぶべき、分かち合い・分け合いを体感するには、幼児期からそれを可能にする保育者・教員の心身両面での余裕が欠かせない。学校教員の国際比較調査は既にあるが、今回、保育者のそれが報告された(NHKラジオ。なお、新聞報道については未見である)。日本の保育者の勤務時間は最長、仕事への満足度は下から2番目という結果である。今なお課題を抱えている保育待機児童解消対策に打つべき手は、今回の国際調査で決定的となった。

なお、OECD 編著／秋田喜代美・阿部真美子・一見真理

子・門田理世・北村友人・鈴木正敏・星三和子訳『OECD 保育の質向上白書』明石書店、2019年は、実態を示した。52、56頁。規制で決められている ECEC の職員一人当たりの子どもの数の上限（図1.5（1/2）で、日本のそれは35人で最多。OECD 平均の倍。幼稚園／プリスクール及びチャイルドケア施設における子ども一人当たり必要最小限とされる空間面積の上限（図1.8（1/2）で、日本のそれは下から2番目の最狭。これが世界の中の日本の現実である。

「外圧」がないと本質的な改革ができないのが、昨今の政治である。普遍性からずれた「改革」には熱心なのは、「改革」と言う看板で衆目を惹こうとする魂胆なのだろうか。世界の中の日本のありようを直視する市民が育つことなくしては、内発的な改革は生まれない。「国難突破」を掲げて選挙を主導した時の安倍晋三内閣は、今回のコロナ禍という、「国難」を前に有効な手立てを取りえなかった。科学的根拠なき「小・中学校全国一斉休校要請」、総計260億円の税金を投入した布マスク配布、特別定額給付金をめぐる政策の不備等が象徴する。

ウイルスは為政者の人心を付度しない。歴史という名の法廷の「被告」として「彼」や「私」は何を弁明するのだろうか。

24) 退職者の筆者が特筆すべきは、集中学科会効果である。学科の課題は構成員によって共通に担われる。全員野球である。それぞれは各自の守備範囲を超えて、バックアップする心意気を共有できた。教育という営みがなされる学校には、組織全体が融合的に機能してこそ、個々の力以上の力が発揮できる。お互いに万能ではない。それぞれの不足部分については、全体の総合力を発揮する中で補うという発想であった。学級づくり・学習集団づくりと同様の精神である。防衛的風土ではなく、支持的風土の醸成である。学校は成果主義的な評価システム自体がふさわしくない組織の最たるものの一つである。文部科学省の学力調査の結果が本来の趣旨から逸脱して悪用される事案がある中、かつて、成績の芳しくない児童に欠席を促し、教員が成績を上げるための当日の不正をしたり、試験対策用の授業を展開したり、といった事例は過去のものになっているのだろうか。

筆者たちが体感できたような経験を持たない人たちの発想なのだろうか。諸事情から走りの遅い児童のいる学級が、知恵と思いを出し合い、全員でカバーしたという事例は各所にある。このような経験をした子どもは、そのような経験のない子ども時代を送った者と同じ発想に立つことはないだろう。直接体験する機会がなかった場合であっても、優れた実践から学ぶことはできる。

25) 本学科における集中学科会には、今回、小文で取り上げた授業に特化した観点からの自己直視に相当する話し合いは生まれなかった。最も難しかった主題であったのだろう。学科構成員が相互に日常的な授業談義を展開するような土壌が醸成されるならば、教員と学生とが授業や学びについて共通の土俵から情報交換する時空が生まれるだろう。小文で鍵言葉としてきた、身体性・直接性・関係性・応答性・即興性等、それぞれが自分に引き付けて考えることになる。かくして教員はさらに人間性と専門性を高めることになり、学生は、身近に一つの典型を見ながら自己形成に努めることとなる。

その点、保育内容授業を担当する藤田由美子と筆者との間で授業相互を架橋する意図をもって担当科目に関する授業の

意図、その実際、学生の実態、課題等を報告した（藤田由美子・徳本達夫「保育者教育における授業担当者間の学びの架橋」〔広島文教教育〕第28巻、2013年所収）。現代社会の中で学生の身体の上に起きている深刻な状態を授業の中で超えるための努力を藤田は、例えば紙芝居の実演という形で試みている。「同僚性・協働性」に資する学生相互の身体的な交流を意図した藤田の取り組みは、渡部淳のいう、「身体モード」の一例である。過剰刺激の洪水の中で身体は本来の反応を示しているのかどうかという点に関する根本的な問いも抱えている。感性教育を専門とする観点からの藤田の実践である。学生の身体への関心の高い藤田のその後の報告が期待される。授業者同士として授業の元になる身体性の部分に関するやり取りがなされたことは貴重であった。

なお、筆者が授業実践報告を示してきたのは、筆者が教育学の学徒であったからである。自身を曝け出すことは、筆者の自己直視のみならず、一つの叩き台としてささやかな役割を果たせるであろうとの期待からであった。本学が大学独自の企画「文教教育双書」として、学科構成員が著作を著した歴史もある。新学部発足記念に、先の双書刊行の趣旨を引き継いで、教育学部双書とでもいうべき、新たな発信が期待される。本学会誌はその礎石になるはずである。

小林が暴力論に関わって、人間が抱えている難問の数々を改めて提起した。残念ながら、集中学科会でもこの種の問題は話題にならなかった。とはいえ、教員は各自、自分の問題として抱えているであろう。国際関係論や平和学といった授業が開講されていれば、学生はそこでその種の問題を考える機会に恵まれる。他方、その種の科目が開講されない場合は、どこで学ぶのか。結論を言えば、当該科目の開講の有無にかかわらず、授業者はこうした問いを常に念頭に置き、授業の中で間接的に言及する姿勢が必要となる。社会科学系の授業ではなくともである。万人の問いとしてである。

難問は無視する分、あるいはすり替える分、さらに深刻になる。丁寧に誠実に向き合うことでしか難問は解決の糸口を見せることはない。大学教育の質保証は年々、高度になる。難問に誠実に向き合い続けることが、個々の大学の存在意義を社会的に発信することになるだろう。事態をより良くしたいという願いを持った学生と共に創設者の建学の精神を継承発展させていくことになるに違いない。

26) 渡部、前掲書、161-3頁。

追記：冬の冷え込みの厳しい日、山口市内の高齢者専用施設で格安の温泉に入る。湯船に入りつつ、10歳の少女栗原心愛さんの SOS に応えきれなかった無念さを想う。水道水は外気温度とほぼ同じはず。冷たさは想像を超える。少女の絶望と無念さ。謝罪しつつ、念仏を唱え続けた。仮に近隣だったとして、筆者は然るべき手が打てたのだろうか。事件を話題にすることで、彼女の無念さに匹敵するだけの仕事をこれまでしてきたのかどうかを自省する。それ無くしては、空虚に響く。根底的にはそのような状況を生み出してきている政治の貧困とそうした政治を許容してきた有権者としての「私」の所業がある。顔向けできる大人はどれほどいるのだろうか。

今回も、「自分の子どもなのに」「産まなければよかったのに」という声をあちこちで耳にした。素朴な感情だろう。同時に、想像力を働かせることで被害者側に近づく努力が必要になるのではないか。両親を極悪非道な人物と捉えるだけでは、事件は再発する。そのような素朴な思いに反するような

事態がなぜ生まれたのかについての想像的な理解である。対話の相手は、その段階以前の思考で留まっている。自分はそのような非道をしていない、してこなかったからであろう。であればなおさら、なぜ、そのような非道が生まれているのかについての実時間分の見識が必要であろう。一面的な非難では、非業の死を遂げた子どもの供養にはならない。事実の隠蔽・改竄・偽装等々、誠実さに反する仕事も社会や人心の劣化を生む。当事者性をどこまで形にできるのか。

時期的には本学本学科は、卒業論文発表会の時期である。事件を生まない社会作りという共通の課題にどこまで応える研究となっているだろうか。指導教員への問いにもなる。そのような課題意識のない研究はないだろうが。

圧政の無い社会では、小さな関係の中でも暴力的な関係は生まれなかったに違いない。国家大の暴力と等身大の暴力とは根底で繋がっている。体罰や虐待に関しても、日本の後進性が国際的に話題になっている。国の基幹統計の問題と併せて、内憂外患の極みである。誠実な日々を営むことが結果として国際的な評価になるという、天の声ではないのか。口先の誠実さではない。言霊のある誠実さである。言葉に魂が入ってこそ非業の死者に相対することが出来る。

還っては来ないいのちを前に「私」が為すべきことは何か。所与の場面で愚直に自身の業をなす続けることをおいて他にはない。このことは誰にでもできることであり、また、そのような営みの集大成が隠べいや改ざん、偽装とは無縁の当たり前前の社会を生む。逆に言えば、当たり前前のことを当たり前前にできない、しない官僚・政治家・企業人・家庭人とは何か。政治家の劣化が人心の劣化を生む。政治家の劣化の姿は、社会的に報道される。責任を取るでもない。社会に与える悪影響は莫大である。合掌。(2019.2.8)

付記：山口市でも24歳の母親による新生児虐待死事件が起きた。性暴力からの避難用福祉施設入所者であり、担当者も相応の関わりをしてきたにもかかわらずに起きた。自治体相互の連携も機能していたのだが。

性暴力と虐待とが対の事柄であることが今回も明らかになった。性差別の結果としての性暴力である。実年数分の見識の度合いが問われる。想像力を最大限にして引き続き関心をもち続けた。話題にすることが供養になる、真相解明と再発防止の一助になる。同時に、性差別にとどまらず、差別に加担せず、差別を否定し、差別を起こさない一人になるような学びを保障することが、すべての学びの前提になる。困難を一人で抱え込まないことも大事になる。省察性・同僚性・協働性という、教員の資質に必須のものを身に付けて卒業することは、抱え込みに陥らず、課題を抱えた人のSOSを感受でき、共に解決に向けての取組を始める力量があるという証である。

社会の意識の低さが悲劇を生み出し続けている。性差別の問題に無関係の者はいない。一連の事件に無罪の人はいのだろうか。政策立案中央の立場にある政治家の責任は重大である。彼らを選出する選挙民の責任はさらに重大である。その際、選出される側の男女比を均等にすることが前提である。男性に偏在した候補者からの選出では男性目線の政策しか生まれない。男女平等という用語への嫌悪から「男女共同参画」という用語が生まれたのもその一例。

政治学者前田健太郎『女性のいない民主主義』岩波新書、2019年が指摘したように、日本は正当な民主主義国家では

ない。今回、目標達成が不可能となった「202030」は本来、「50」を目指すべきである。「天の半分を支える」人びとへの当然の敬意である。政治への女性参画を高めることが諸々の課題解決の最優先課題である。目標達成年度すら明示しない政治姿勢が政治の劣化を象徴する。限りなく「50」が実現していれば、性暴力に関わる虐待死はどれほど防げたであろうか。普遍性を実現すべく各国の人びとが不断の努力を重ねている。その果実を着実に享受しつつ、足りない部分は希望の種として将来世代に託している。翻って、日本ではいかに。進捗状況は彼らの比ではない。人間の豊かさという宝の果実を味わうことなく一生を終えるのはいかにもったいない。

優れた見本は周辺に多々ある。大崎亜由美「対話する社会を目指した乳幼児期の環境」(『広島文教教育』第34巻、2019年所収)は、その動向の一端を描く。北欧の保育現場訪問という共通の対象に対してどう応答するかは、それぞれの身体性によることも鮮明になる。本誌読者にはその材料がある。複眼的視点を単独者として持つことは、危うさからの避難に、本質への道筋発見にも資する重要な視点である。

優れた作品との出会いが欠かせない。5.15事件で暗殺された犬養毅を描いた林新・堀川恵子『狼の義一新 犬養木堂伝』角川書店、2019年のあとがきに堀川は記す。「昨今、政党政治は混迷の度をいよいよ深め、犬養が何よりも大切に政治家の倫理も崩壊の危機に瀕しています。私欲を排し、国家の行く末を真剣に考え、命を削る覚悟で政界を生きている政治家は、果たして幾人いるでしょうか。(中略)私たちが現代の諸問題に向き合う際の道標になりえることを信じて止みません」。470頁。犬養首相のラジオ演説の一節。「わが大和民族は、海外に出て行っても一切の武装をせず、平和なる工人、平和なる農民、平和なる商人で資材を確保すればいいじゃないか」。433頁。この場面、「切れるような語調は、痛烈というより凄愴の気すら帯びていた」と、林・堀川は描く。優れた表現者は鋭い時代社会感覚を生き、優れた先人を真正な形で甦らせる。堀川の作品はいずれも読み手を奮い立たせる。眼前の世界が全てではない。普遍的本質的な問いを持って「もう一つの在り方」を模索する。対照的な生きた教材を反面教師として学ぶことから真正な「改革」は始まる。(2019.2.17/2020.12.22)

補記：小文は本学会会員3名による共同作業として構想された筆者の草稿の一部である。最年長の筆者の力量不足で共同作業としての成稿には至らなかったが、今回、呱呱の声の一端は示せた。いつの日にか構想通りの作品へと結実することを願っている。

コロナ禍時代は、これまで等閑視してきた負の諸相を顕在化させた。あるいは負の諸相を加速化させた。ウイルスによってではなく、不安・失業・孤立・排除によって人びと、とりわけ女性たちが苦悩する。急増する女性、とりわけ若い女性の自死は痛恨事の最たるものである。少子化はこの国の未来に希望を抱くことができない女性たちの生物学的実感に基づく選択なのではないか。コロナ禍は少子化を加速する。

打開策は一つ。コロナ禍を奇貨として、主権者としての不断の努力によって新しい生き方を模索する好機とし、政治の貧困を克服するしかない。コロナ禍以前の社会の検証は現在進行形でなされている。徹底した検証と克服と、新しい仕様が死者への供養となる。格安の温泉での念仏唱えは続いている。合掌。(2020.5.17/12.22)